

令和8年度 第1回小平市総合教育会議 議事録

1 日 時

令和8年6月30日（火）午前10時00分から午前11時09分まで

2 場 所

小平市役所 5階 505会議室

3 出席者

（構成員）小平市長 小林 洋子

教育委員会

教育長 青 木 由美子

教育長職務代理者 阿 部 善 雄

委 員 望 月 克 浩

委 員 吉 本 一 謙

委 員 川 辺 美 沙

（構成員以外の出席者）

川上企画政策部長、原こども家庭部長、白倉教育部長、寺本教育指導担当部長、足立地域学習担当部長、小柳政策課長、谷川保育課長、青木保育指導担当課長、細村教育総務課長、山下教育施策推進担当課長、事務局職員2名

（傍聴者）1名

4 会議内容

午前10時 開会

（開会宣言）

○小林市長

おはようございます。

定刻になりましたので、ただいまから、令和8年度第1回小平市総合教育会議を開会いたします。進行は会議の主催者であります私が務めさせていただきます。

教育長及び教育委員の皆様には、日頃から、小平市の教育行政の推進にご尽力いただき、改めて深く感謝を申し上げます。

昨年度の総合教育会議での協議を振り返りますと、昨年度7月に開催した第1回総合教育会議では、「学校施設の複合化を契機とした地域コミュニティの醸成」をテーマに議論いたしました。この協議を通じて、複合化により期待されることや課題などを皆様と共有できたと考えておりま

す。また12月に開催した第2回総合教育会議では、「生きる力を育む小平市のこれからの特別活動」をテーマといたしまして、教育長及び教育委員の皆様のこれまでの経験などを踏まえ、小平市の特別活動に対するご見解をお聞かせいただきました。

昨年度の2回の会議では、教育委員会の皆様のご協力により、有意義な意見交換ができましたことに、改めて御礼申し上げます。本日も、これからの教育行政に生かすため、皆様の率直なご意見をお聞かせいただきますようお願い申し上げます。

(報告事項)

○小林市長

それでは、次第に沿いまして会議を進めます。

次第の2番、報告事項でございます。「小平市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画の策定について」でございます。

本計画は、公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法第8条第1項に基づき、教育委員会が定めるものとされており、さらに、同条第3項において「教育委員会は、業務量管理・健康確保措置実施計画を定め、又は変更したときは、遅滞なく、これを公表するとともに、総合教育会議に報告するものとする」と定められておりますことから、今回、策定についてご報告いただくものです。

それでは、教育委員会事務局から説明をお願いいたします。

○寺本教育指導担当部長

報告事項「小平市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画の策定について」を報告いたします。資料2をご覧ください。

初めに、1の目的でございますが、公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法が本年4月1日に改正され、服務監督教育委員会である市教育委員会が業務量管理・健康確保措置実施計画を定めることと規定されたことから、小平市立小・中学校に勤務する教職員の時間外在校等時間、教職員のワーク・ライフ・バランス及び働きがい等に関する目標を定め、教職員の業務量及び健康確保の適切な管理を行うものでございます。

次に、2の目標でございますが、(1)時間外在校等時間に関する目標といたしまして、1点目として、1か月の時間外在校等時間が45時間以下の割合を100%にすること、2点目として、1年間における1か月の時間外在校等時間の平均時間を30時間程度にするものでございます。

(2)ワーク・ライフ・バランスや働きがい等に関する目標といたしまして、1点目として、ストレスチェックにおける高ストレス者の割合を10%以下まで減少させること、2点目として、ストレスチェックにおける健康リスクの値を80以下にすること、3点目として、ストレスチェックにおける働きがいなどに関する質問項目への肯定的な回答の割合を90%以上にするものでございます。

次に、3の計画対象期間でございますが、本年4月1日から令和12年3月31日までの4年間でございます。

次に、4の実施する業務量管理・健康確保措置の内容でございますが、業務の3分類を踏まえた業務の見直しのほか、学校における措置の推進や教職員の健康及び福祉の確保に関する取組を、本計画期間中の重点的事項として取り組んでまいります。

最後に、5の関連する取組、今後のフォローアップについてでございますが、取組の着実な実行を図るため、市内各学校の教職員の在校等時間やストレスチェックの結果等の状況を把握し、毎年度、目標の達成状況を市のホームページで公表するとともに、教育委員会定例会及び総合教育会議において報告いたします。本計画の内容に照らして課題が見られるときは、当該学校への個別の支援・指導を行います。また、保護者や地域の各団体等に対して、本計画の内容について周知を行うとともに、具体の項目について協力を得られるように取り組んでまいります。

以上でございます。

○小林市長

ありがとうございました。

公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法の改正により、今回、業務量管理・健康確保措置実施計画の策定について報告していただきましたが、来年度以降も第1回総合教育会議において、前年度の実施状況を報告いただくものと承知しております。

本改正の趣旨は、学校における働き方改革を一層推進するため、総合教育会議で本計画の内容や実施状況を報告していただくことにより、学校の現状や課題を教育委員会と地方公共団体で共有し連携を図っていくものと捉えております。お示しいただいた目標に向けて、教職員の業務量及び健康確保の適切な管理をお願いいたします。

（協議事項）

○小林市長

続きまして協議に移ります。

本日の協議事項は、「こどもの育ちや学びをつなぐ架け橋期の幼保小連携」でございます。

小学校に入学したばかりの新1年生が、学校生活に適応できず、授業規律が成立しない状態が数か月にわたって続くことがあります。いわゆる小1プロブレムといわれているものです。

これまでは不安なく過ごせていたこどもが、小学校に入学して突然落ち着きがなくなったりすると、保護者の大きな戸惑いや不安にもつながるため、早い段階での対応が非常に重要であると考えております。

このような状況は、様々な要因が重なって生じるものと理解しておりますが、幼稚園や保育園と小学校との環境や、こどもと先生や保育士との関わり方の違いが大きな要因の一つであると捉えております。具体的には、保育園・幼稚園では、遊びや体験を通じた学びや保育が中心である

のに対し、小学校に入ると、各教科の学びが求められます。

これまでも各小学校において様々な工夫がなされていると承知しておりますが、私が特に注目している取組が、幼保小連携でございます。幼保小連携とは、幼児教育や保育と小学校教育を円滑に接続しこどもの発達と学びの連続性を保障するための協働した取組を指します。

本市では、既に、小学校・幼稚園・保育園連絡会の実施やこげら就学支援シートの活用、入学後の学習補助員の配置など、様々な取組を行っております。さらに、こども家庭部と教育委員会が連携し、「小平市架け橋期のカリキュラム」を先月作成し、これまで以上に計画的・継続的な取組を、年間通じて行っていくこととしております。

教育委員会の皆様には、幼保小連携をはじめとした課題解決のための取組に対するご意見・ご見解をお聞かせいただければ幸いです。いただいたご意見等を踏まえ、効果的な施策に結び付けてまいりたいと存じております。

それでは、まず、事務局から説明をお願いいたします。

○寺本教育指導担当部長

初めに、小平市における幼保小連携の取組状況について、概要を説明いたします。A4縦版の資料をご覧ください。

まず、小平市立小学校と幼稚園・保育園における連携の好事例といたしましては、専門的交流、体験・参加型プログラム、施設の日常的活用、多世代交流、広範囲連携がございます。

時期に応じた連携と引継ぎルートにつきましては、接続前期、接続中期、接続後期、そして次年度へと、各期に応じた連携を実施しており、引継ぎ方法といたしましては、書類による引継ぎを行うとともに、状況に応じて、担任間による電話連絡や訪問による引継ぎを行っております。

障がいのあるこどもへの支援体制につきましては、切れ目のない支援を実現する引継ぎ手法として、就学前からの専門的な視点による支援、こげら就学支援シートの積極的な活用、希望する保護者・本人との事前面談・体験、教員及び保育士同士の引継ぎとなっております。

A4縦版資料の最後、連携の工夫と課題です。連携の工夫は、複数園同時交流、児童主体の取組、保護者の協力、朝の穏やかな設定があります。推進上の課題は、日程の調整、引継ぎの効率化、体制の持続性が挙げられます。

次に、小平市架け橋期のカリキュラムについて説明いたします。A3横版の資料をご覧ください。これは、小平市架け橋期のカリキュラムの全体像を示しており、この全体像と、各幼稚園・保育園等が作成するアプローチカリキュラムと、各小学校が作成するスタートカリキュラムを合わせて、小平市架け橋期のカリキュラムとなります。

本全体像は、これまでの市内における幼保小連携の取組を生かすとともに、更に継続的かつ年間を通した計画的な連携及び交流の機会を充実させ、幼保小が円滑に接続できるようにすることを目的として作成したものでございます。

上段をご覧ください。左から右にかけて5歳児と小学校1年生の育成すべき資質・能力を示し

ております。

その下の左側には、目指す人間像として、自立・貢献・共生の三つの共通の視点を。そして、その視点ごとに、1年間を3つの時期に分けて、目指す人間像の具体的な姿を示しております。

例えば、自立の視点においては、5歳児の12月から3月までの時期において、健康で安全な生活の中で、自分の力を発揮しながら自信を持って行動することができるようにして小学校へ進学させることを目指し、小学校1年生の4月から7月までの時期においては、これらを踏まえて、自分でできそうなことを見付けて試したり、やり直したりしながら、新しい生活に慣れることができるように支援していくこととなります。

このように、保育園・幼稚園側から見ると、小学校入学までに育てておきたい姿をイメージしながら5歳児の1年間を過ごすことが可能となり、小学校側から見ると、保育園・幼稚園において何を学んできたかを理解した上で、小学校1年生の活動を計画できるという効果がございます。

その下の段に書かれているアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムにつきましては、この架け橋期のカリキュラムに示されている目指す児童像や時期、これ以降に書かれている保育・指導における配慮事項、連携における配慮事項等を踏まえて、各校・各園が作成していきます。

初めに説明しましたように、各校・各園が作成したカリキュラムと、この全体像を合わせることで、小平市架け橋期のカリキュラムが完成いたします。

説明は以上となります。

○小林市長

ありがとうございました。それでは、皆様からご意見を伺います。

まず、阿部教育長職務代理者からお願いいたします。

○阿部教育長職務代理者

本日は、小林市長におかれましては、大変お忙しい中、このような機会を設けていただきまして、ありがとうございました。また、事務局の皆様には資料の作成、本施策に関する様々な推進に携わっていただいたことを心からお礼を申し上げます。

本件について私の考えを述べさせていただきます。

環境が人を育て、人を変えと言われる。しかし、園から小学校へ変わるに当たっては、あまりにも大きな変化があり、こどもたちが不安を感じたり、あるいは、イライラしたりした際に、保護者がどうしようかと迷ってしまうようなことがあってはならないと思っています。

まず、小学校の役割は、保育園・幼稚園から小学校に上がるに当たって、全員を新しい波にしっかり乗せることだと考えております。そのことについて、私から3点お話をさせていただければと思います。一つ目は連携の在り方、二つ目は支援の継続性、三つ目は学校経営についてでございます。

一つ目の連携の在り方については、接続のための情報連携と教育内容の連携の大きく二つに分

かれると考えます。

私自身の小学校勤務での経験を振り返ってみますと、保育園・幼稚園から小学校に入学するための情報や保護者の困りごとなどを小学校がしっかり取り入れるといった情報の連携は多かったのですが、事務局から説明があった架け橋期のカリキュラムのような教育内容の連携は、あまりやってこなかったということを反省している次第でございます。

本資料に示されているように、小平市が誇るべき点は、こどもたちの環境が大きく変化しても波を乗り越えられるようにするための、架け橋期のカリキュラムという具体的な設計図を持っているということだと思います。保育園・幼稚園における遊びの体験を通したアプローチカリキュラムと、小学校の学習の基盤を作るスタートカリキュラム。これらが、自立・貢献・共生という小平市の目指す人間像に向かって、一つの道筋としてつながっています。

保育園・幼稚園と小学校では、指導方法や指導技術に様々な違いがあつたとしても、指導者が同じ教育観をもつこと、同じ児童観・園児観をもつということは、とても重要だと思います。そして、このようなことを指導者が意識することで、こどもたちは知らず知らずのうちに、保育園・幼稚園から小学校への移行をスムーズに果たすことができると考えます。即効性はないのかもしれませんが、そのことを定着させることで、大きな進化があるのではないかと考えます。

二つ目は、支援の継続性についてです。

私事で恐縮ですが、時間外を使って地域のこどもたちに剣道を教えています。もちろん、小学校に入学する前のお子さんも通ってくれています。知的障がいとは診断されていないものの、認知面や発達面で課題を抱えるこどもたちが、適切な支援を受けないことで、不真面目だとか努力が足りていないと指導者に思われてしまうことをたくさん見てきました。稽古を見ている保護者もつらい思いをされているかと思います。

このようなこどもたちに対して、本市では、こげら就学支援シートという取組をしています。保護者の思いや園での様々な活動を、小学校に架け橋期のプログラムと一緒につなぐことが、とても価値のあることだと考えています。

最後に三つ目の学校経営の視点です。

小学校とは異なり、中学校では教科担任制ですので、3年生を卒業させた教員が、次の1年生を受け持つということが多々あります。教職員は、生徒を3年間自分たちがしっかり面倒をみるのだということで、小学校との連携について自分事として取り組めるということがあると思っています。

ところが、小学校では1年生から6年生まで6年間の教育課程ですので、1年生の担任がそのまま6年生まで持ち上がり卒業させることはまずないと考えられます。そうしたときに、校長が各学校を経営する視点の中で、架け橋期のプログラムや保育園・幼稚園と小学校の連携を含めて、ポイントとなる担当教員に対応できる適切な職員を配置し、園の情報をくまなく全職員に伝えて、新1年生の担当者にしっかりつないでいく、そして、その情報はその教員だけではなく、学校全体で共有をして自分事として学校全体で連携を推進していくという組織体制が、学校経営の視点

として求められると思います。

小・中学校の連携で言いますと、どんなに多くても6校くらいの小学校が1校の中学校に連携することとなると思いますが、園と小学校では、非常に多くの園から子どもたちが小学校に上がってきます。そういった中で、継続的に園と小学校の連携を進めるためには、そのような視点を捉えた学校経営の推進が必要と考えます。

私からは以上でございます。

○小林市長

ありがとうございました。

阿部教育長職務代理者は元校長先生ということで、学校経営の視点でお話いただきました。おっしゃっていただいたように、小学校は一定数の目の届く範囲内の小学校から中学校に子どもたちが上がってきます。しかし、園となると、幼稚園と保育園で違いがありますし、保育園の数は最近増えておりますので、様々な園が特徴を持って教育活動・保育活動をしている中で、子どもたちが小学校に上がってきたときにいかにうまく融合していけるかというところが、この架け橋期のカリキュラムの大事なところであると改めて考えさせられたところでございます。そのような意味でも、冒頭に具体的な設計図というお言葉もいただいたかと思っております。先生方からすると、このような具体的な設計図があるということは、どのように受け止められると感じていらっしゃいますか。

○阿部教育長職務代理

園における様々な取組や遊びを通した指導・保育については、今までと変わりはないのだと思います。しかし、小学校へ入学するに当たって、このような目指す児童像があって、このようなところを目標にしましょうということを知っているだけでも、指導方法や保育方法は変わってくると思います。

例えば、お散歩の時間であるものの、今日はお散歩に行きたくないという子どもがいたら、ゆっくり休んでくださいというような言葉がけをしながらも、その中で、小学校に慣れるためにはどうしていこうかと考えることができますので、教育観という意味合いで、園と小学校の連続性があるというのは、とても大きいかと思います。そして、小・中学校は教育委員会の管理下ですが、架け橋期のカリキュラムは市長部局と教育委員会が連携しているということになるので、非常に有意義なものではないかと考えます。

○小林市長

ありがとうございます。

やはり、それぞれの園で様々なことをお考えになりながら特徴を持って保育・教育に当たっていただいておりますが、小平市全体として、具体的な設計図というこの架け橋期のカリキュラム

を活用していただければと思っているところです。また、支援の継続性や連携の在り方などについてもご意見をいただきました。ありがとうございました。

それでは、続きまして望月委員、よろしくお願いいたします。

○望月委員

小林市長におかれましては、本日このような場を設けていただきまして、ありがとうございます。そして、事務局の皆様には、資料をご用意いただきありがとうございます。私からは、架け橋期のカリキュラムについて、保護者の視点を含めてお話しさせていただきます。

まず、幼稚園・保育園から小学校への移行というのは、こどもたちにとって大きな成長の節目だと思います。これまで、幼稚園・保育園で慣れ親しんだ環境から、新しい先生、新しい友達、新しい生活へ変化することで、こどもたちが期待や楽しみを感じる一方、不安や戸惑いを抱える部分があると思います。

保護者から見たときも、新しい環境になって学校生活になじめるだろうか、友達関係は大丈夫だろうか、先生は自分のこどものことを理解してくれるのかなどの心配があると思います。だからこそ、小学校側が入学後にこどもたちを学校に合わせるのではなく、入学前から幼稚園や保育園とつながって一人一人の個性を理解した上で迎えるというのが大事なことはないかと思います。

本日の資料で示された架け橋期のカリキュラムの意義に関しては、5歳児から小学校1年生の学びと生活のつながりというところが、小学校の教育につなぐ非常に大事な取組の部分ではないかと思います。その中で、実際にこどもや家庭の安心につなげていただくために、どのような不安があるのかを理解し、それに寄り添った準備をしていただくことが非常に大事ではないかと思います。

ポイントとしては、四つの点があると思います。

一つ目は生活のリズムです。幼稚園・保育園では、先生方の見守りの中で生活をします。一方、小学校では、時間割に合わせて行動しますので、自分で準備や片付けをすることが増えていきます。そのため、入学前から学校見学や交流の活動をできるだけ行っていただき、小学校がどのような場所なのかを知る機会がより多くあれば、こどもの安心につながると思います。

二つ目は学習面です。保育園・幼稚園における幼児期の学びは、遊びや体験の中で育っていくと思います。こどもたちは、考えること、工夫すること、友達と協力することを通じて、いろいろ学んでいます。小学校では、その力を生かして学習につなげることになると思います。できる、できないということではなく、やってみたい、分かったといった経験を積み重ねることで、学ぶ自信が育っていくのではないかと考えています。

三つ目は集団生活です。小学校では、多くの友達と関わるため、自分の思いを伝えること、相手の考えを聞くこと、協力をする必要があるになってくると思います。これは、小平市の目指す共生につながる大切な部分ではないかと思っています。一人一人の違いを認めて、安心して人と

関わる事ができる学級づくりができれば、より良くなっていくのではないかと感じています。

最後に、四つ目は保護者の安心という点です。学校が大切にしていること、こどもの育ちを分かりやすく伝えていただくこと、学校で行われていること、こどもの様子がどうだったかということなど、保育園もそうですが、小学校においてもできるだけ家庭への発信を多くしていただけると、保護者は非常に安心できるのではないかと思います。

架け橋期の取組の具体例として、京都市で行われている架け橋通信というものがあります。こちらは、実際にどのようなことをしているかを、取組が終わった後も、誰でも見られるような形で公表されています。ぜひ、幼稚園・保育園から小学校に上がるときには、このような形で学びや安心につなげていますという発信を強化していただけると、より良くなるのではと思っています。

また、現在行われているこげら就学支援シートの活用に関して、こちらも非常に良い取組だと感じています。これがより活用されるためにも、こげら就学支援シートを保護者が安心して書くことができ、情報を出していただけるような工夫が必要だと思います。お子さんが苦手なことや個性などを多く書いていただき、もっと利用されることが、架け橋期のカリキュラムに生きてくるのではないかと思います。今あるものをより使っていただけるような取組を、ぜひ増やしていただけたらと感じています。

最後に、こどもたちから見たときに、小学校は楽しい場所や安心して過ごせる場所と感じられるようにするために、幼稚園、保育園、小学校、家庭が同じ方向を向いて、こどもの成長を支えていくことが必要ではないかと思います。幼保小連携を単なる交流で終わらせるのではなく、育ちをつなぐ取組に発展させていくことが、小平市が目指す自立・貢献・共生につながる教育になると私は信じております。

以上でございます。

○小林市長

ありがとうございました。保護者の視点からのお話であったかと思います。

最後の部分で、園も小学校も、そして保護者も同じ方向を向くということが非常に大切ななと思いました。実際に、望月委員のお子様が園から小学校に入る時はいかがでしたか。不安でしたか。

○望月委員

こどもは、不安に感じている部分もあったのかなと思います。私には2人のこどもがおりますので、性格上それぞれ違う反応をしていましたが、何らかの形で不安やストレスを感じていることはあったと思います。楽しそうにランドセルを背負ってはしゃいでいたところもありましたが、少なからずそういったところは見受けられたと感じています。

○小林市長

保護者としてはどうでしたか。

○望月委員

保護者としては、本当に大丈夫かなという心配がまずありました。新しい環境に入って、小学校で先生方にご迷惑がかからないかという不安であったり、こどもたちが楽しく生活ができるかどうかということを、当分の間、夏休みを過ぎるくらいまで気にしていたということが正直なところありました。こどもが、調子が悪いとか風邪を引いたと言ったときに、学校に行きたくないのではないかとずっと気にかけていたことを、今でもよく覚えています。

○小林市長

ありがとうございます。

特に保育園ですと、こどもが生まれた時からお世話になっている園から全然違う環境になるので、保護者の不安も大きいのかなと改めて思ったところです。そのことに対しては、望月委員がおっしゃった情報発信が大切であり、保護者にしっかり届くような情報発信を務めていかなければいけないのだろうと感じたところです。ありがとうございました。

それでは、続きまして吉本委員、お願いいたします。

○吉本委員

小林市長におかれましては、本日、お招きいただきありがとうございました。事務局の皆様には、資料の準備や説明をありがとうございました。私からは、こどもの育ちや学びをつなぐ架け橋期の幼保小連携というところで、大きく三つの視点でお話しさせていただきたいと思います。一つ目は、事務局からの説明を受けて感じたこと、二つ目は、望月委員からもありましたが、保護者としての実体験、三つ目はどのような取組をしてほしいのかということを考えてきましたので、よろしくお願いします。

一つ目は、事務局からの説明を受けて、小平市が幼稚園・保育園から小学校への架け橋期を非常に大切に考えて、幼保小の先生方が連携しながら、こどもたちの育ちと学びを切れ目なく支えていこうとしていることが、大変理解できました。単に入学前の情報を引き継ぐということだけではなく、自立・貢献・共生という目指す人間像を、幼児期から小学校へ一貫して育てていこうというこの架け橋期のカリキュラムは、とてもすばらしい取組だと感じています。

また、資料の説明の中では、交流活動や体験活動、引継ぎ、障がいのあるこどもへの切れ目のない支援など、様々な取組が紹介されていました。現場の先生方が、こどもたち一人一人のことを考えながら取り組まれていることを、大変ありがたく感じました。

二つ目に、保護者としての実体験になりますが、私自身、小学3年生の息子と小学1年生の娘がおります。今回のテーマから、特に直近で入学した小学1年生の娘が入学した頃のことを思い

出しました。そこで娘に、入学してからの学校での様子について聞いてみました。

最初に娘が話してくれたのは、国語や算数といった勉強をするのが初めてであったことと、ずっと椅子に座って授業を受けるのは大変だったということです。私たち大人からすると、小学校では当たり前なことだと思いましたが、こどもにとっては、椅子に座って1時間の授業を受けることも、教科書を開いて学習することも、全てが初めての経験なのだと改めて感じることができました。

その一方で、体育はみんなと一緒にできるから楽しい、小学校は楽しいとも話していました。この言葉を聞いて、小学校という場所はこどもにとって楽しみな場所である一方で、不安や緊張を抱えながら一步步慣れていく場所なのだなと感じました。こどもは非常に順応する力があると思いますが、その最初の一步を少しでも安心して踏み出せる環境を作っていくことがとても大切なことだと感じています。

そこで、どのようなことをしたら、この安心して踏み出せる環境に少しでも近づけることができるかと考えました。

三つ目の取り組んでほしいこと、となりますが、体験活動を増やしてほしいと考えていて、幼稚園・保育園の年長さんがプレ1年生として、小学校を実際に体験するような機会を増やしてほしいです。

娘は幼稚園のときに、小学校でどんぐり遊びをしたという体験を覚えていて、それが楽しかったと言っていました。今でも実施されていることがあると思いますが、例えば、小学校の朝の会に参加する、1年生の国語や体育の授業を体験する、給食や休み時間を小学生と一緒に過ごす、学校の施設、図書室や校庭を自由に探検してみる。こういった経験をたくさん積み重ねることで、こどもたちは、小学校は怖いところではないんだな、先生って優しいんだな、お兄さん、お姉さんは優しいな、早く小学生になりたいなと感じ、前向きな気持ちを持って入学できるこどもが増えるのではないかと考えました。

また、この体験のメリットは、こどもだけではなく保護者の方にとっても、こどもから話を聞くことで学校の雰囲気が分かり、安心して送り出せると感じられ、とても大きな安心材料になると思います。

また、説明の中で連携を深める上での課題として、日程調整、情報共有、継続性等が示されていました。現場の先生方の努力に頼るだけでなく、小平市全体として継続できる仕組みをできるところから一つずつ、一緒に考えていきたいと思いました。ICTを活用したりしながら、こどもたちが安心して小学校生活をスタートできる環境を、ここから更に充実させていただきたいと思います。

最後になりますが、私自身も小平市出身で感じているのですが、小平市のこどもたちが、学校って楽しいんだよ、学校へ行くのが楽しみ、小平市の小学校で良かった、と思えるような架け橋期の幼保小連携の取組が、今後更に発展していくことを期待しています。

ありがとうございました。

○小林市長

ありがとうございました。

今、ワールドカップで盛り上がっていますが、そういった熱も、こどもたちに伝えていきたいと思うところでございます。また、実際にお子様にもインタビューをしていただいてありがとうございます。やはり、お子様のお話は率直な意見であると思います。こどもからすると、少し戸惑うこともあるけど、でもやっぱり楽しいところもあるということで、そのことをスムーズにすることが、この架け橋期のカリキュラムだと思っております。

ハードルを少しでも下げて、こどもたちがよりスムーズに小学校に接続できるようにというのは、私も感じているところです。おっしゃっていただいたように、こどもがどれだけ入学前に小学校に関われるかということが、ハードルを下げられる肝になると思っております。このカリキュラムの中に連携ということで、予定ではございますが、小学校、幼稚園、保育園連携の日というものが示されています。このような日を設けて、こどもたちが関われる日を作っていきたいと思っています。

吉本委員には2人のお子さんがいて、上のお兄ちゃんの方は初めて学校に行くのに対し、下のお子さんは、お兄ちゃんと一緒に小学校に行ったというところが、大きな違いかなと思いますが、その辺りは実感としてどうでしょうか。

○吉本委員

今、市長がおっしゃっていただいたとおり、上の子は一人で学校に行くのが、保護者としてもすごく心配だったのですが、下の娘は兄と手をつないで行っているので、保護者としても安心でした。娘は、放課後に小学校の校庭へ行くなど、上の子について行くことが多かったので、その体験活動の多さが、早い段階で学校の楽しさを知ったことにつながっているということとはとても感じています。

○小林市長

ありがとうございます。

幼保小連携をこの先どのように進めていくかという課題についても共有していただきました。日程調整や情報共有、継続性という課題もありますが、どの課題が最も大きいかというお考えがあれば、お示しいただければと思います。

○吉本委員

やはり、日程調整が一番難しいと考えました。一つの小学校にたくさんの幼稚園や保育園の方が来ることになりますし、また、幼稚園や保育園からいろいろな小学校に分かれていくと思うので、自分が通う学校に行くことは難しいと思いますが、近くの小学校などで日程調整をして、自

分が通う小学校ではなくても体験してみることができればと思います。

○小林市長

ありがとうございました。

それでは、続きまして川辺委員、よろしくお願いいたします。

○川辺委員

この度は、小林市長におかれましては、お忙しい中、とても貴重な機会をいただき感謝しております。また事務局の皆様には、分かりやすい資料を作っていただき、本当にありがとうございました。改めて拝見して、小平市においてはこのように架け橋期のカリキュラムを作り、目に見える形で共有し、取り組んでいることについて、本当に素晴らしいことと感じております。

今回のテーマをいただき、幼保小連携とは何かということ、教育委員として、また、母親として、そして日頃ピアノ講師として架け橋期のお子さんたちと接している立場から考える機会となりました。

まず、母親として思い出すのは、自分のこどもたちが小学校に入学するとき、私自身がとても不安だったということです。ちゃんと学校まで行けるだろうか、座って授業を聞けるだろうか、給食は食べられるかな、忘れ物は大丈夫かな、友達はできるかなと、心配は本当に尽きませんでした。今振り返ると、そうした親の不安というのをこどもも敏感に感じ取っていたのではないかと思います。だからこそ、幼保小連携では、こどもへの支援だけでなく、保護者を不安にさせない接続という視点で、保護者が安心してこどもを送り出せるような情報提供や場作りも大切だと感じます。

困りごととはご家庭によってもそれぞれだと思いますが、顔を合わせて話すということがとても大事だと思っています。例えば、入学説明会や就学時健診の機会に、通学や給食、朝の支度、友達関係などの身近な不安や困りごとのようなものを気軽に聞けるような、話し合えるような時間が少しでもあると、家庭の安心につながるのではないのでしょうか。

次に、教育委員の立場として考えると、幼保小連携の大切さと同時に、現場の先生方の負担についても考える必要があると思います。一つの小学校に、実に多くの保育園、幼稚園、認定こども園からこどもたちが入学してきます。市の境に近い地域では、小平市内だけでなく近隣市の園に通っていたお子さんもいると思いますし、園ごとにカラーも様々です。そのこどもたちが、ある日を境に一つの教室で机を並べて学ぶということを考えると、先生方のご苦労というのは想像に難くありません。

だからこそ、全てを個別に丁寧に引き継ごうとするだけではなく、仕組みとして無理なく続く形にすることが本当に大切だと思っています。小平市には、こげら就学支援シートという必要な配慮を小学校につなぐ仕組みがあります。内容を拝見しましたが、とても良く、意味のあることだと思います。必要とする家庭にしっかり届くように、周知を工夫していくことも大切ではない

かと思います。

引継ぎの際に、苦手なことだけでなく、また、障がいの有無ということだけではなく、どのようなことで安心するのか、どのような活動なら入りやすいのか、集団の中での困りやすい場面は何かといったような、その子を支えるための情報が小学校にしっかり伝わると、入学後の安心につながると思います。通常の情報共有は効率化し、特に配慮が必要なお子さんについては、園と学校と保護者が、必要に応じてしっかりとつながる。そうしたメリハリのある連携も必要なのではないでしょうか。

最後に、日頃ピアノ講師として多くの架け橋期に当たるお子さんたちと一対一で接している立場から申し上げますと、幼児期から低学年のこどもたちは、一人一人発達の差がとても大きいと感じます。4月生まれと3月生まれでは、ほぼ1年間の違いがありますし、同じ年齢でも、得意なこと、苦手なこと、集中できる時間や身体の使い方、読み書きの力、言葉で表現できる力には大きな差があります。

私のレッスンでは、入り口として、その子の得意なポイントを見つけることを大切にしています。できないことを直すというところから始めるのではなく、歌うことなら入れる子、リズムなら楽しめる子、まねをするのが得意な子など、その子が安心して参加できる入り口を見つけることで、少しずつ学びに向かう力が育っていきます。

小学校に入った途端に、座って聞く、正しく答えるという世界が強くなりすぎると、不安を感じたり、もしかしたら自分を出しにくくなってしまったりする子いるかもしれません。私が拝見した小平市における取組状況の中で、特に良いことと思ったのが、朝の緩やかな設定でした。登校後に少しゆったりとした時間を取り、例えば、入学直後の朝の時間にゆったりとした時間を少し取っていただいて、園で親しんできた歌や手遊び、簡単なリズム遊びなどを取り入れることも、幼児期と小学校をつなぐ自然な橋になると思います。

音楽は聴く、まねる、合わせる、待つ、そして表現するという力を、こどもたちが安心して身に付けられる活動の一つです。幼保小連携は、こどもを小学校に合わせるためだけのものではなく、幼児期に育ってきた力を小学校が丁寧に受け取り、つなげていくものだと思います。

最後になりますが、こどもたちを支える連携であると同時に、小中連携や不登校対策にも通じるところだと思いますが、保護者を安心させ、先生方を支え、そして必要な支援からこぼれ落ちる家庭を出さないための仕組みとして考え発展させていくことが大切であり、こどもが安心して通えることが、スムーズな小学校での学びにつながるのではないかと考えております。

以上になります。ありがとうございました。

○小林市長

ありがとうございました。

母として、またピアノ講師としてということでお話をいただきました。一対一で架け橋期のお子さんをというお話でしたが、川辺委員はご高齢の方を対象に集団のレッスンもされていたかと

思います。年齢は違いますが、一對一のレッスンと集団のレッスンは、気を付けるところが違うものですか。

○川辺委員

はい、違います。一對一ではその方の特徴、例えば、先ほど申し上げたように、得意なことであつたら、ここが得意だから伸ばしていきましょうということや、苦手なところがあれば、ポイントはここなので丁寧に進めていきましょうといった具合に、個別にその方と一對一で、その方の課題を直接見つけるということが出来ます。

一方、集団では、私の場合、ご高齢の方の歌のレッスンやコーラスをやりますが、例えば、楽譜が読める方、読めない方、日頃家で全然声を出すことが無い方、日頃から合唱をやっている方など、様々な方がいらっしゃるの、集団のカラーやメンバーを捉えた上で、真ん中のポイントを見つけます。どのようにしたらみんなが楽しめるかなど、一つの集団として押さえるべきポイントを見つけるというところで、個人の場合とは本当に違うなと思います。やりがいはいずれもありますが、大変さがそれぞれにあります。

○小林市長

ありがとうございます。

真ん中のポイントを見付けるというお話をされましたけれども、まさしく、架け橋期のカリキュラムが真ん中になるのだと思いました。様々な個性のあるこどもたちが集まってきた中で、先生たちが架け橋期のカリキュラムを真ん中にすればいいという指針になるのではないかと改めて思いました。

母親として、気軽に話し合える場づくりが必要なのではないかというお話もいただきましたが、具体的な例として、健診の場を挙げていただきました。ご経験の中では、なかなかそのような場はなかったですか。

○川辺委員

ありませんでした。健康診断や説明会などに行っても、先生のお話を聞いて資料をもらって帰るというような感じでした。例えば、周りのお母さんと顔見知りになるとか、先生方と直接交流できる機会があつたらいいなと思います。

○小林市長

ありがとうございます。

同じ園から行くご家庭だとか、知っている人がいる方はよいのですが、自分が通う園からは一人しか入学しない場合や、他市から引っ越してくる方もいらっしゃるの、入学前にちょっとした知り合いができているというのはやはり心強いですね。ありがとうございました。

それでは、最後に青木教育長、よろしくお願いいたします。

○青木教育長

小林市長には、令和8年度第1回小平市総合教育会議を開催していただきまして、誠にありがとうございます。事務局につきましては、幼保小連携に関する小平市教育委員会の調査結果と「小平市架け橋期のカリキュラム」の資料のご説明をありがとうございました。

小平市立小学校でも取り組んでいる幼保小連携に焦点を当てて、市長と教育委員会とで協議・意見交換を行う貴重な機会となりました。市長から今回ご提案いただきました、こども家庭部と教育委員会が連携し作成した「小平市架け橋期のカリキュラム」について、教育委員の皆様から意見や見解をお聞きしましたので、それをまとめながら、私の意見や見解を述べさせていただきます。

まず、小1プロブレムの困りごとについてですが、市長もお話しされていたように、入学直後の新1年生が学校生活に適應できない事例は、かねてから少なくないと認識しております。望月委員のご発言にも、生活リズムや集団の規模、あるいは学習などへの不安があるのではないかとありました。実際に、私がかつて副校長として小学校に着任した際にも、なかなか学校になじめなかったお子さんがおりました。しばらくの間、教室に入れずに、ある時は、私が図書室や校庭で一緒に過ごしたこともありました。そうした状況の要因の一つは、環境の違いに適應できず、お子さんが不安を抱えてしまうのではないかとその当時も捉えておりました。そしてそれが、川辺委員のご発言にあったように、保護者の不安、心配、困りごとになるのではないかと思います。

小・中学校の接続に関しても、いわゆる中1ギャップといわれている、中学校入学直後の新1年生が、学校生活になじめない事例も少なくありません。小学校の学級担任制から中学校の教科担任制に変わったり、人間関係が広がったりするなどの環境の大きな変化が、要因の一つであると考えられます。そのため、各中学校では、小・中学校の教員が情報共有したり、同一日に、中学校の見学や体験ができる日を設けて、授業の様子を参観したり、部活動の説明を受けたりなど、直接的に体験や交流をしています。

現在、市内の小学校において、幼保小連携は継続的に実施されています。例えば、ある学校では、3学期に近くの園の園児を招待し、1年生が学校見学や学校探検などを一緒に行ったり、1年生の学級に招待して出し物を披露したり、また、小学校の音楽会のリハーサルを見学してもらっている学校もあります。一方で、教員、保育士同士の交流に課題を感じたり、また、近隣の幼稚園、保育園の数が多いことから、園児と児童の交流に課題を感じたりしている学校もあるようです。

ここで、本市が3年にわたり進めている幼保小の研究について触れさせていただきます。文部科学省からの委託で、白梅学園大学と小平市の小学校、幼稚園が進めてきたものです。報告書を見ると、研究開発の内容の中に、幼児教育と小学校教育の連携・接続に関する課題が記されています。一部ですが読み上げます。「形式的な連携にとどまり、本格的な普及が進まない現状がある。

その背景には、全国的に小学校は公立が多数を占め、校区の意識が高いのに対し、幼稚園等は私学の園が多く、校区どころか自治体を超えて園児が通園することがあるだろう。卒園児の進学先はいくつもの小学校に分散する。幼小双方とも、どの園と学校が連携を行うのか選択が難しい。」と、本格的なカリキュラム連携に至らない要因がこのように記されています。また、「共通の理念と枠組みをもつカリキュラムの開発と実践を通して、学びの発達の意向が進むことを示す必要がある」と記述されています。

こうしたことから、幼稚園、保育園、小学校が連携する上で、共通の理念と枠組みを持つカリキュラムとしての「小平市架け橋期のカリキュラム」を作成できたことは、大変意義深いことであると思います。各園で、それぞれの5歳児期アプローチカリキュラムを作成したり、各小学校で、それぞれの1年生期スタートカリキュラムを作成したりしても、この架け橋期のカリキュラムに書かれている全体像の中で、先ほど吉本委員のご発言にもありましたとおり、小平市が目指す人間像、自立・貢献・共生を共通の視点として掲げていること、そして5歳児と小学校1年生の2年間における育成すべき資質・能力が一覧となっていることなどから、阿部委員のご発言にあった設計図として、双方において、保育や指導の方向性や見通しが持てるのではないかと私は感じました。

小平市の幼保小連携、さらには小・中連携による約12年間の切れ目のない取組が、小平市で子育てしたいと思う要因の一つになることを期待したいと存じます。さらに、一つ付け加えるならば、小平市教育委員会では特別活動を推進しており、小・中学校ともに、自分の意見も人の意見も大切に話し合う活動や多数決によらない合意形成などを実践しています。阿部委員のご発言にありましたように、正に教育内容の連携になり、幼児期の体験的な活動の中でこのカリキュラムの共生の箇所を見ると、5歳児のところで人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わうであるとか、友達のよさに気付くであるとか、互いの思いや考えなどを受け止め共有し、共通の目的の実現に向けて、協力し、充実感を味わうなどと書かれています。そのような幼保の体験的な活動の中で、特に共生の視点の活動において、小・中学校で実践している特別活動なども意識していただけますと、12年間の切れ目のない教育活動の一助になるのではないかと思います。

課題といたしましては、来年には、国から新しい学習指導要領が告示されると思われます。育成すべき資質、能力等、この先10年を見通して、適切な取組となるように、適宜、修正を図る必要があると考えます。また、今後も、教員、保育士、こども、保護者から意見を収集したり、実態を把握したりして、検証していくことも大切であると思います。そのためには、市長部局と教育委員会事務局との更なる連携が重要です。

本日は、市長におかれましては、総合教育会議を開催していただき、誠にありがとうございました。この総合教育会議を通して市長と教育委員会が協議・意見交換を行うことで、更なる理解を深め合うことができたのではないかと思います。小平市の教育に関する事業が積極的に推進できるよう、今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

以上でございます。

○小林市長

ありがとうございました。

青木教育長の小学校の副校長時代のご経験も踏まえてのお話でございました。やはり、最後におっしゃっていただいたように、作っておしまいではなく、検証を続ける、アップデートし続けるという意識が大事だと思いました。ありがとうございました。

皆様、貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。そろそろ終了の時間となりましたので、本日の議論のまとめをさせていただきます。

本日は、「こどもの育ちや学びをつなぐ架け橋期の幼保小連携」をテーマに、皆様から多角的で示唆に富むご意見を賜りました。いただいたご見解の多くに、私も深く共感いたしました。

幼保小連携は、幼稚園・保育園と小学校が垣根を超えて協力する取組でございます。それぞれの事務を取り扱う市長部局と教育委員会が、引き続き連携して取り組んでまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（閉会）

○小林市長

それでは、本日の議題は以上となります。

次回の定例の総合教育会議は、１２月に予定しております。引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは、本日の会議はこれで閉会といたします。ありがとうございました。